あしなが育英会機関紙でたどる津波遺児支援

資料１　**「特別一時金」給付決定**

［2011 年 4 月発行震災号外］あしなが育英会は東日本大震災の発生から 2 日後に、親を亡くした子どもたちへの「特別一時金」給付を決定した。その他震災直後の活動の紹介（特別一時金は寄付が集まるごとに増額してその分を追加送金。最終的には、年齢に関わらず 1 人当たり 283 万円を 2083 人に給付した）

資料２　**「特別一時金」お知らせ活動開始**

［2011 年 5 月発行第 117 号］4 月 11 日にあしなが育英会東北事務所開設、翌日から育英会職員と遺児学生による「特別一時金」制度の“お知らせ”活動を開始

資料３　**ＮＹで津波遺児らが街頭募金実施**

［2011 年 7 月発行第 118 号］2011 年 6 月、米国のニューヨーク・タイムズスクエアで、東日本大震災遺児が 2001 年の同時多発テロなどが原因の現地の遺児たちとともに街頭募金を実施

資料４・５　**東北職員 4 年目の手記**

［2015 年 3 月発行第 137 号］東日本大震災発生から 4 年後（仙台レインボーハウス完成 1 年後）の、あしなが育英会の東北での活動状況と東北事務所職員の手記

資料６　**震災 7 年、それぞれの思い**

［2018 年 3 月発行第 152 号］東日本大震災から 7 年の総括及び、2018 年の 1 月に神戸、3 月に仙台で開催された阪神淡路と東日本、両震災の遺児家庭の交流のようす

資料７・８　**心のケアの原点、神戸レインボーハウス**

［2019 年 1 月発行第 157 号］あしなが育英会の心のケア活動の出発点、阪神淡路大震災で親を亡くした子どもたちの支援施設「神戸レインボーハウス」の紹介

資料９　**進学支援はこれからが正念場**

［2019 年 3 月発行第 158 号］東日本大震災から 8 年を機にまとめた、あしなが育英会の東北支援状況

資料 10　**あしなが育英会が学んだ米ダギーセンターとは**

［2019 年 3 月発行第 158 号］阪神淡路大震災直後のあしなが育英会の活動状況と、心のケアの基礎的なことについて示唆をいただいた米国オレゴン州・ダギーセンターの紹介

資料 11・12　**神戸と東北をつなぐ交流会**

［2019 年 12 月発行第 162 号］2019 年 11 月に仙台で開催された阪神淡路と東日本、両震災の遺児家庭の交流のようす

「特別一時金」申し込み　347 人に（4 月 14 日 16 時 現在）

東日本大地震・津波で親を失った 0 歳から大学院生までに 特別一時金を給付

☆東日本大地震・津波 緊急対応措置☆

①「特別一時金」給付制度の新設

東日本大地震・津波で親を失った 0 歳から大学院生までに「特別一時金」の給付を決定しました。40 年以上の遺児支援・あしなが活動で初めての措置です。

対　　象	金　　額
未 就 学 児	10万円
小・中 学 生	20万円
高　　校　　生	30万円
大学・短大・専門学校・大学院生	40万円

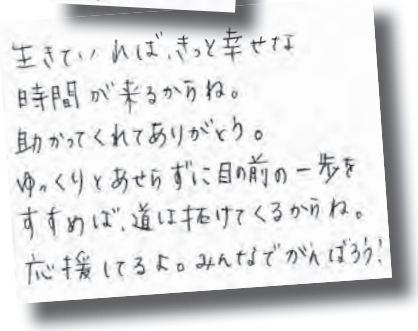
なお、従来からの高校奨学金、大学奨学金、専門学校奨学金、大学院奨学金、高校・大学入学一時金制度も利用できます。

②あしなが育英会奨学金制度（貸与）の特例措置

従来の高校・大学・専修学校・各種学校・大学院の奨学金制度の特例措置も実施します。速やかな送金を図れるよう、提出書類・面接試験の免除や、貸与対象となる条件を緩和するなどの措置を決定しました。

③子どもたちへの心のケア

あしなが育英会では経済的な支援だけではなく、子どもたちの心のケアにも取り組んでいます。阪神・淡路大震災の被災地に「神戸レインボーハウス」を建設し、震災から 16 年間ずっと子どもたちを支える活動をしています。神戸と同じように子どもたちの心のケア活動にも力を尽くします。あしなが育英会は職員を被災地に派遣し、4 月 11 日には東北事務所を仙台市に開設しました。



※被災された子どもたちへのメッセージをお送りください

① ホームページ（www.ashinaga.org）または右下のＱＲコードで携帯サイトにアクセス
② FAX：03-3221-7676
③ 郵送：〒 102-8639
東京都千代田区平河町 1-6-8
あしなが育英会
④ E-mail：tegami@ashinaga.org

津波遺児訪問レポート

「あの家に必ず帰ります。何年先になっても。亡くなった夫の魂が待っているから」

ご主人は港近くで仕事中だった。夫を亡くした麻美さん。震災時、小学2年の智君と、幼稚園年長の美貴ちゃんの3人で宮城県内の実家に避難している。

麻美さんの家は沿岸に建っていた。あの津波で、すべてが流された。今でも元の家の周辺には海水が溜まっている。家の跡地に行くことも、生活用品も、思い出一つも探すことさえできない。「長女の小学校入学用品が流されました。机もランドセルも。主人も楽しみにしていたのに…」。モノだけでない。家族の気持ち、想いなど、たくさんのものが、津波にのみこまれた。

私は長男の智君と教育雑誌の付録で遊んだ。しばらくすると、私の膝にのってきた。「せっかく友だちになったのに、もう2度と会えないの?」。帰る間際に、智君の目が潤んだ。刹那的な言葉に驚かされた。

長女の美貴ちゃんは、遺児学生の菅原小由里さんとお絵かき。「お母さんには内緒だけど、悲しい気持ちをがまんしてるの」。菅原さんに胸の内を明かした。

「保険証もないから、病院にいけない。ケガは困るから、外では遊ばせない」。まったく先が見えない。ストレスばかりだが、大人も子どもも耐えるしかない。

ご主人の亡骸は震災から4日目に発見された。火葬はできない。土葬の順番を待っている。

「会えるうちに、子どもたちを主人に会わせたい」。3人は遺体安置所になっている市の体育館に毎日通っている。

先のことはまったく決まっていない。でも、何年かかっても、家族が揃っていた、あの場所、あの家に帰ること。そのことが、今日、生きる支えになっている。(文中仮名)

八木俊介（やぎ・としゆき）

〝面のケア〟めざす

〝東北レインボーハウス〟を変革の第一歩に
東北の人々は〝癒しの心〟を生まれつき持っている
被災各地でサテライト（小規模ハウス）活動

16年前の阪神・淡路大震災では573人の遺児が生まれた。彼らは心に深い傷を負った。「黒い虹」を描く子。「死にたい」と言う子。不登校、無気力、非行、摂食障害、閉所・暗所不安症…。「自分を助けるために親が死んだ」と自責の念を抱く子は半数にも及んでいた。彼らの多くが「神戸レインボーハウス」で癒され成長した。

この経験から、ケアが早いほど遺児たちの不幸を縮めることができると確信している。「東北レインボーハウス」（仮称）をぜひ2年以内に建設したい。

まず、集まりやすいように、仙台市内で交通の便がよい場所に建設したい。200人の遺児、保護者、ボランティアが一堂に集まり交流できる広間や体育館、簡素な宿泊施設も必要だ。遺児たちは経済的にも困窮している。通うための交通費や宿泊費などは全額をあしなが育英会が負担する。同時に心のケアを担うボランティア（ファシリテーター）を多数、広範囲に養成する。

1999 年に完成した神戸レインボーハウス（神戸市東灘区）。完成直後は震災遺児らが毎日通ってきた

次に必要なのは〝線〟から〝面のケア〟に広げるための被災地域ごとのサテライト・ハウスである。仙台のハウスにはセンター的機能を持たせ、被害の大きな沿岸部になるべく多く、サテライト機能の小ハウスを設置したい。各地域の事情に応じて、現地の方に設置運営をお願いしたい。あしなが育英会が主体となるのではなく、その土地の方に委ねることが心のケアにはより有効と考える。これは「やさしい東北の文化」の継承である。

心配されるファシリテーター不足は、レインボーハウス以外に、行政、学校等での「養成講座」で補うこととし、いつでも本会ケア担当職員を派遣したい。受講者だけでなく広く県民の方々にご理解いただきたい。それは、東北が歴史的に持つ人間のやさしさ、文化のふところの深さが形になることなのだと信じているからだ。

（八木俊介＝あしながレインボーハウス・チーフディレクター）

（1）　平成6年6月30日第三種郵便物認可（毎号1日発行）継続ご支援者のご寄付に購読料が含まれています。　　第117号

第117号
2011年（平成23年）
5月1日（5月号）
（定価 50 円）

NEW あしながファミリー

編集責任者
玉井　義臣
発行所
あしなが育英会
〒102-8639　東京都千代田区
平河町 1-6-8　平河町貝坂ビル
TEL・本部　（03）3221-0888
百草　（042）594-7766
神戸　（078）453-2418
ウガンダ　Kagga Road, East2 Zone, Nansana, Wakiso, Uganda

津波遺児へ〝お知らせ〟活動

「一時金 全員に配る！」 奨学生ら行脚開始

あしなが育英会は東日本大地震・津波遺児支援として、「特別一時金」の給付を地震から2日後の3月13日に決定。4月11日には遺児支援に本格的に取り組むため、仙台市に「東北事務所」を開設した。翌12日からは職員と遺児学生が5チームに分かれ、避難所などを訪問。ポスター掲示や対象者への周知を図る〝お知らせ活動〟を開始した＝号外面あゆみ参照＝。同時に岩手、宮城、福島の3県の幼稚園、保育園、小学校に申請書を送付。4月22日には全国の中学校、高校、大学にも送付した。また、〝心を癒す家〟「東北レインボーハウス（仮称）」建設に向け専用口座＝下記＝を設けご寄付を募る。建設費は、神戸と東京のレインボーハウスの経験から30億円前後を見込んでいる。

4月12日、職員5人をチームリーダーに東北地区等のあしなが大学奨学生10人を加えた計15人で、3人ずつの5組を編成した。

目指すは岩手県で被害甚大な宮古市、釜石市、山田町・大槌町、大船渡市、陸前高田市。これら5地区を1チームが3日かけ、各避難所や、保育園から大学までを回り、避難所の責任者や先生などに会って特別一時金制度の周知徹底を図るためのポスター貼りを行った。いずれの地区も復旧のめどすらたっておらず、私たちの作業は困難を極めた。

すでに1か月の避難所暮らしを強いられている大人たちの無表情さ。子どもは無邪気に見えたが、その心のうちはさぞつらく悲しく不安でいっぱいなのだろうと、容易に想像がつく。

複数の先生が被災し、それでも子どもたちのため必死に学校を維持していた。遺児の将来を心配する大人に直接制度紹介ができた。数人の遺児にも会えた。彼らは大学生の遺児の先輩が来てくれたことに驚きを隠さなかった。

4月20日から宮城県縦断活動を敢行。早くしないと被災者は分散してしまう。県庁の協力も必要だ。全国に散らばった被災者の方々にどう伝えていったらいいのか！

（林田吉司＝理事・東北事務所長）

「とにかく急いで徹底的に回り支援制度を知らせよう！」。入念に打ち合わせる大学奨学生スタッフら＝4月13日岩手県遠野市

避難所等に一時金ポスターを貼る＝4月15日岩手県宮古市

最大の挑戦が始まった

あしながレインボーハウス チーフディレクター
八木　俊介

亡くなった方、行方不明の方が5千5百人を超えた石巻市。3月中旬、東日本大地震・津波遺児と初めて出会った。その小6の女の子は、母親と弟を亡くした。彼女自身も、一緒に津波に流された。しかしトラックにしがみついて、奇跡的に助かった。

避難先の彼女はヘッドホンで音楽を聴きながら、ゲームをしていた。私が保護者の方と話していた1時間、彼女はずっと無表情だった。動かない、話さない。ひたすら、画面を見続ける。その姿は、ゲームを楽しんでいるようには見えない。

「母、弟の死。津波で流された車、家、街。自分自身の命の危機」

そんな現実を、受け止められない。そう見えた。

ゲームの画面をみつめる彼女のまなざしは、虚無感と悲しみにあふれていた。

その日だけで、6人の遺児を訪問した。広範囲に多くの遺児が生まれた。

あしながが東北事務所の林田所長、若宮職員、富樫職員、遺児学生を中心に、「あしなが支援制度お知らせチーム」を結成。岩手県沿岸の避難所、学校約400か所を訪問。「一時金・奨学金」のポスターを貼る。避難所の責任者や先生に説明する。「お知らせチーム」の効果は抜群。一時金申込み数は500件を超えた。

16年前の阪神大震災での、ローラー調査を思い出す。約千人のボランティアが、573人の震災遺児を探してくれた。行政にも出来なかったことだ。神戸レインボーハウスの心のケア活動に、ローラー調査は不可欠だった。

すべての津波遺児を見つけたい。「お知らせチーム」の活動はその原動力、原点になる。あしなが運動40年で、最も勇気を持った、最も大きな挑戦が始まっている。市民の方々の応援も必須だ。津波遺児探しのお知恵やお力を貸してください。

「悲しみがいっぱいで、自分の命を支えられない」

それほどに深く悲しみ、思い悩む。そんな津波遺児が心配だ。自暴自棄、無気力になっている子ども。幼い遺児は赤ちゃんがえりをしているかもしれない。

被災地に入る前日、大人になった阪神の遺児からメールが届いた。

「私はあしなが育英会に出会わなければ、生きてこられた自信がありません。生きる力と、父の死と向き合う勇気をくれました。感謝の気持ちでいっぱいです」

津波遺児たちに、生きる希望を見つけてほしい。ひとりぼっちにさせたくない。

（2011・4・22記）

東日本大地震・津波被害
皆さまに心からお見舞い申しあげます

3月11日に宮城県沖で発生した大地震・津波で被災された皆さま。あしなが育英会役職員・関係者一同、心からお見舞い申しあげます。

あしなが東北レインボーハウス建設募金
郵便振替口座　00120-7-355615

平成６年６月３０日第三種郵便物認可（毎号１日発行）継続ご支援者のご寄付に購読料が含まれています。

第１１８号
2011年（平成23年）
7月1日（7月号）
（定価 50 円）

NEW あしながファミリー

編集責任者
玉井　義臣
発行所
あしなが育英会
〒102-8639　東京都千代田区
平河町 1-6-8　平河町貝坂ビル
TEL・本部　（03）3221-0888
百草　（042）594-7766
神戸　（078）453-2418
東北　（022）299-2418
ウガンダ　+256（414）535610

「Please help Japan!!」。東日本大震災で親を亡くした津波遺児が自らの声で訴えた＝6月9日、NYタイムズ・スクエア

NY 津波遺児 魂の訴え

「世界の人に思いを伝えたい」。玉井義臣会長と東日本大地震・津波遺児の高校生らが米国ニューヨーク市を訪れ、6月9日、NY9・11同時多発テロ遺児、ハリケーン・カトリーナ災害遺児らとともに街頭募金を実施し、津波遺児の現状や心のケアセンター「東北レインボーハウス」建設の必要性を世界のメディアを通して訴えた。宮城、岩手県の高校を通じての呼びかけに、自ら手をあげ、NY渡航を決断した高校生らの勇気と行動力に、世界の方々から励ましと応援の声をいただいた。＝4・5面特集

共生

編集長　玉井　義臣

☆「（生活）特別一時金」のスピード制定が称賛と信用高める☆

今年ほどあしなが育英会への評価が急激に高まったことはない。運動の実績への評価、それにくっついて上がる信用は四十余年運動を創業し牽引してきた私にとって実に快い手応えである。

日本人の評価の第一は、「津波遺児」たちへの支援策に日本一のスピード感があったことだろう。

地震発生時の「3・11」、私は出張先のアフリカのウガンダの、ホテルで荷を解きTV（CNN・CCTVなど）をつけた。経済市況をやっていた。とたん画面が急変、大津波の襲来で人、家、自動車が大きな流れに翻弄されている。相当高いビルも壁にスッポリ丸が開いたり、倒壊している。堤防も水をせきとめられず用をなさない。痛ましいのは人と思われる〝物体〟が引き潮のときTVに写し出される。外国版はノーカットで残酷で思わず目を覆う。家族も親戚も友だちも家財も自動車も、そして多くの想い出のよすがであったアルバムも、形になっていないそれぞれ一人ひとりの〝お宝〟も海の彼方に押し流された。辛い。恐ろしい。悲しい。空しい。黒い光景だ。

そのとき、東京本部から電話。「午後、副会長らと常勤理事らと事務局長らは対策を議論したが、会長（玉井）がいないと決着がつかない、一番早い便で帰国してほしい」と吉田事務局長。ウガンダのあしなが事務所であるレインボーハウスに寄って帰る暇もなさそうで、トンボ返りを覚悟した。

日本への飛行機が出るのは翌12日16時15分発のエミレーツ機で、途中、エチオピアとドバイで止まって成田着は3月13日17時半。時差を抜くと20時間位になる。大変な長丁場だ。

一夜寝て機中の人となる。乗り物の中ではメモ片手にさまざまな思いをはせる。何が問題なのか。どうすれば問題解決するのか。日本の新聞もなし、報道なしの状態だ。でも問題点の整理をしつつ一睡もせず、考え続ける。

対策のポイントは〝着の身着のまま〟の被災者にしぼる。ほとんど無一物の状態を想定する。そうこう考えているうちに、日本の成田空港に着く。日本時間で17時35分。直ちに東京本部に。

私が帰国前、3月13日午前中、4副会長（下村、村山、村田、藤村は代理）と、小倉弁護士、会からは吉田事務局長、監事の山北、理事の林田、小河が参加して問題点と緊急支援の対策について議論したが、会長不在のためまとめるまでに至らなかった。

同夜帰国、副会長会議の説明を受け発言した。被害者は〝着の身着のまま〟が救済のポイントと考えると、①教育費より何に使ってもいい「使途自由」、②本会初めての、「貸与」でなく「給付」にすべきである。③「返済不要」と断を下し、直ちに副会長に電話で説明し承認を得た。こうして3・11から2日後、〝生活〟一時金は日本で一番早く誕生した。（2面に続く）

今号の紙面

津波遺児支援

花巻のつどい開催（3面）
ＮＹ募金報告（4～5面）
激励のお便り（6～7面）

第137号　（第三種郵便物認可）　NEW あしながファミリー　2015年（平成27年）3月1日（3月号）　（4）

おしゃべりの部屋では丸く輪になってみんなの顔を見ながら話す＝陸前高田

雪が積もる季節でも広々とした遊戯室で自由に体を動かせる＝仙台

遺児とあしなが　再生への苦闘

現地若手職員は今

2015年3月11日。東日本大震災から4年が経過した。

国内外から寄せられる多くのご支援と温かい想いを震災遺児に届けるため、本会は物心両面での支援に取り組んできた。

14年に仙台、石巻、陸前高田の3か所に完成した虹の家では、震災遺児家庭同士の出会いと交流が広がり、深まってきた。また、笑顔、涙、安心、怒りなど、遺児たちが表現するさまざまな感情はファシリテーター（心のケアのボランティア）がていねいに受け止めている。

しかし、震災遺児とその家族が抱える課題は世帯ごとに多様、複雑であり、その克服は容易ではない。きめ細やかで継続的、長期的な支援が今後とも必要とされる。

子どもや保護者と向き合う中での現状、また日々職員が感じ考えていることを報告する。

（あしなが育英会東北事務所）

継続的・長期的な支援を

黙祷ができない子も

3月11日になったら、自分はどうなってしまうのか不安」という声、「2011年3月11日はまだ会えることを楽しみにしていた日。家族の死を知った12日以降がつらい」という声をよく耳にした。そして今年もテレビでは2時46分に黙祷する各地の映像が映し出された。だが震災遺児の中には、黙祷ができない子もいる。亡くなった人を思うことが大切なのはわかっているが、2時46分にはまだ生きていたから黙祷をする気持ちになれない、黙祷することは死を受け入れることになるなど、さまざまな気持ちがある。

そして震災遺児にとって3月11日だけがつらいわけではない。「親がいない」ことを実感する日がつらい」。石巻レインボーハウスでの保護者の話で出た言葉です。今までも保護者の方とたくさんお話をしてきましたが、ここまで参加者の皆さんの気持ちが出た会は初めてでした。

もう4年、されど4年。

私が感じることは4年たったからこそ言えたのではないかということです。何回もあしなが育英会のプログラムに参加して、いろいろお話をして、笑って、泣いて、冗談を言って、顔見知りにもなって、それでも言えなかった気持ちが4年を迎えるにあたって言えた。そう感じました。レインボーハウスは何年たっても震災のことや大切な人のことを話せる場所であり、話を聴く人がいる場所です。これからもレインボーハウスはそんな場所であり続けたいと思います。

（佐藤優貴記者）

違い受け止め自信に

震災のことや、それが理由で親を亡くしたことについて、子どもたち一人ひとりが感じていることの違いが顕著になりつつあるように感じる。震災・津波の話をしたくない子。震災・津波の話はできるが亡くなった親の話をしたくない子。亡くなった親の話ができる子。違いに年齢は関係なく、それは子どもたち一人ひとりの素直な思いを表している。

子どもたちは今後、学校行事や進路選択、成人式など親のいないことを実感する場面は何度もある。そのことを実感するタイミングは一人ひとり違うが、その時々に子どもたちの気持ちを受け止め、寄り添うことで、出会いと交流を積み重ねていくことで「自分はひとりじゃない」「これでいいんだ」と子どもたちが自分に自信を持って歩めるようにサポートしていきたい。

（山下高文記者）

元気な子の顔も一面でしかない

震災遺児に必要なことは何か、現状はどうかなど見学者や支援者、マスコミなどから、様々な質問を受ける機会がある。だが、2000人以上いる震災津波遺児とその保護者、その一人ひとりにそれぞれの物語がある。今も行方不明の父親を探す子ども、夫の帰りを待ちながらも、毎月11日に夫に花を供える母親。レインボーハウスを訪れる子どもたちは元気いっぱいに遊ぶ姿が多い。だが、それもまたその子たちの一面でしかない。

地域の違いも強く感じる。陸前高田市は瓦礫撤去を終えた地域でかさ上げ工事が進む。自宅跡に、思い出の場所に、花を供える場が立ち入り禁止になっている。亡き人への思いを届ける場所を奪われている。復興のためにやむを得ないとしても、変わらぬ思いをどこに届ければよいのか。時間と共に生活をするために進まなければいけない。けれども、変わらない気持ちがある。その葛藤を想像すると言葉が出ない。

場となかまが必要

だからこそ、震災津波遺児が自分の感情や気持ちに丁寧に触れられる場と、共に歩む仲間が必要だ。

（富樫康生記者）

子らと一緒に成長

レインボーハウスに来る子どもたちの寝顔を見て、子どもたちの亡くなった保護者が今思っているだろう気持ちを話してくれた。子育て経験の有無に関係なく、子どもたちに寄り添う中で、亡くなった保護者の存在は亡くなったら終わりではなく、目に見えなくても常に傍にいる存在だということを改めて思った。

子どもたちからもふとした時に「そういえばね、（震災で亡くなった）お父さんも○○だったんだよ」と大切な人の話をする。そんな時に子どもたちが失った大切な人のことを思い出して話せる、話す時に「そうなんだ、そういうことがあったんだね」と聞いてくれる人がいる空間を何年経っても大切にしていきたい。

（板垣恵美記者）

保護者も困難抱える

「旦那さんなくしてよかったわね、お金たくさんもらえて」。ある母親は、仕事道具を全て流された地域住民からこう言われた。傷つけるつもりはないのかもしれないが、そんな言い方をしなくてもね、と母親は虹の家で職員に話した。

震災直後「みんな一緒」と話していた地域が、もう「同じ」ではなくなった。4年が経過し、そう話す遺児家庭は少なくない。状況の差異から誰かの言葉で傷ついたり、誰かを嫌な気持ちにさせまいと会話内容に気を遣ったり、人付き合いを煩わしくさせている。

見学に訪れた地域住民から、こういう名前の子が誰を亡くしていて、今どこに住んでいるはずだが、その子は来ているのか、と尋ねられることがあり驚いた。被災地によっては町が狭く、良いことも悪いことも、色々な情報が地域に広まる。学校や家で話せない気持ちを抱える子どもたちと同様に、保護者もまた、周囲に気を遣って地域の中で話せないことを多く抱えているように感じる。

（小川里奈記者）

「学校では亡くなった親の話はできないけど、レインボーハウスならできる。」と言う子は多い。子どもたちはいつでも大切な人のことを思っている。私も、そんな子どもたちをいつでも思って日々を過ごし、一緒に成長していきたいと願っている。（今井紗有里記者）

震災遺児と共に歩む

4年たち言える事も

「みんな2時46分に黙祷するけど、この時間はまだ生きているの、いつ亡くなったかはわからないからこそ、46分をすぎてからがいちばんつらい」。石巻レインボーハウスでの保護者の話で出た言葉です。今までも保護者の方とたくさんお話をしてきましたが、ここまで参加者の皆さんの気持ちが出た会は初めてでした。

もう4年、されど4年。

私が感じることは4年たったからこそ言えたのではないかということです。何回もあしなが育英会のプログラムに参加して、いろいろお話をして、笑って、泣いて、冗談を言って、顔見知りにもなって、それでも言えなかった気持ちが4年を迎えるにあたって言えた。そう感じました。レインボーハウスは何年たっても震災のことや大切な人のことを話せる場所であり、話を聴く人がいる場所です。これからもレインボーハウスはそんな場所であり続けたいと思います。

（佐藤優貴記者）

違い受け止め自信に

震災のことや、それが理由で親を亡くしたことについて、子どもたち一人ひとりが感じていることの違いが顕著になりつつあるように感じる。震災・津波の話をしたくない子。震災・津波の話はできるが亡くなった親の話をしたくない子。亡くなった親の話ができる子。違いに年齢は関係なく、それは子どもたち一人ひとりの素直な思いを表している。

子どもたちは今後、学校行事や進路選択、成人式など親のいないことを実感する場面は何度もある。そのことを実感するタイミングは一人ひとり違うが、その時々に子どもたちの気持ちを受け止め、寄り添うことで、出会いと交流を積み重ねていくことで「自分はひとりじゃない」「これでいいんだ」と子どもたちが自分に自信を持って歩めるようにサポートしていきたい。

（山下高文記者）

元気な子の顔も一面でしかない

震災遺児に必要なことは何か、現状はどうかなど見学者や支援者、マスコミなどから、様々な質問を受ける機会がある。だが、2000人以上いる震災津波遺児とその保護者、その一人ひとりにそれぞれの物語がある。今も行方不明の父親を探す子ども、夫の帰りを待ちながらも、毎月11日に夫に花を供える母親。レインボーハウスを訪れる子どもたちは元気いっぱいに遊ぶ姿が多い。だが、それもまたその子たちの一面でしかない。

地域の違いも強く感じる。陸前高田市は瓦礫撤去を終えた地域でかさ上げ工事が進む。自宅跡に、思い出の場所に、花を供える場が立ち入り禁止になっている。亡き人への思いを届ける場所を奪われている。復興のためにやむを得ないとしても、変わらぬ思いをどこに届ければよいのか。時間と共に生活をするために進まなければいけない。けれども、変わらない気持ちがある。その葛藤を想像すると言葉が出ない。

場となかまが必要

だからこそ、震災津波遺児が自分の感情や気持ちに丁寧に触れられる場と、共に歩む仲間が必要だ。

（富樫康生記者）

子らと一緒に成長

レインボーハウスに来る子どもたちの寝顔を見て、子どもたちの亡くなった保護者が今思っているだろう気持ちを話してくれた。子育て経験の有無に関係なく、子どもたちに寄り添う中で、亡くなった保護者の存在は亡くなったら終わりではなく、目に見えなくても常に傍にいる存在だということを改めて思った。

子どもたちからもふとした時に「そういえばね、（震災で亡くなった）お父さんも○○だったんだよ」と大切な人の話をする。そんな時に子どもたちが失った大切な人のことを思い出して話せる、話す時に「そうなんだ、そういうことがあったんだね」と聞いてくれる人がいる空間を何年経っても大切にしていきたい。

（板垣恵美記者）

保護者も困難抱える

「旦那さんなくしてよかったわね、お金たくさんもらえて」。ある母親は、仕事道具を全て流された地域住民からこう言われた。傷つけるつもりはないのかもしれないが、そんな言い方をしなくてもね、と母親は虹の家で職員に話した。

震災直後「みんな一緒」と話していた地域が、もう「同じ」ではなくなった。4年が経過し、そう話す遺児家庭は少なくない。状況の差異から誰かの言葉で傷ついたり、誰かを嫌な気持ちにさせまいと会話内容に気を遣ったり、人付き合いを煩わしくさせている。

見学に訪れた地域住民から、こういう名前の子が誰を亡くしていて、今どこに住んでいるはずだが、その子は来ているのか、と尋ねられることがあり驚いた。被災地によっては町が狭く、良いことも悪いことも、色々な情報が地域に広まる。学校や家で話せない気持ちを抱える子どもたちと同様に、保護者もまた、周囲に気を遣って地域の中で話せないことを多く抱えているように感じる。

（小川里奈記者）

「学校では亡くなった親の話はできないけど、レインボーハウスならできる。」と言う子は多い。子どもたちはいつでも大切な人のことを思っている。私も、そんな子どもたちをいつでも思って日々を過ごし、一緒に成長していきたいと願っている。（今井紗有里記者）

（5）　2015年（平成27年）　3月1日（3月号）　NEW あしながファミリー　（第三種郵便物認可）　第137号

四季折々のプログラムで言葉にならない感情が表れることも＝陸前高田

言葉では表現できないさまざまな感情を火山の部屋で発散＝仙台

東日本大震災　あの日から４年

支援の拠点　東北レインボーハウス

○レインボーハウスの比較

	仙　台	石　巻	陸前高田
階構成	4階建て	3階建て	2階建て
構　造	既存:鉄筋コンクリート造 増築:鉄骨造	既存:鉄骨造 増築:鉄骨造	鉄骨造
延べ床面積	既存:1,513.66㎡ 増築:771.51㎡	既存:463.82㎡ 増築:666.67㎡	1,201.60㎡
遊戯室の床面積	366.02㎡	180.74㎡	191.23㎡
火山の部屋	有り	有り	有り
おしゃべりの部屋	有り	有り	有り
着工時期	2013年7月	2013年6月	2013年4月
完成時期	2014年3月	2014年3月	2014年6月

○東北レインボーハウス建設募金(2014 年3月受付終了)

合　計	件数:4 万 8985 件	金額:49 億7862 万 8659 円

○東日本大地震・津波遺児募金(2014 年3月受付終了)

収入	件　数	金　額
寄付金合計	25万793件	62億974万4261円

支出	給付者数	支出金額
特別一時金	2,083人	58億7732万9048円
住宅被害特別一時金	168人	5640万円
合計		59億3372万9048円

○あしなが東日本大震災遺児支援募金(2015 年1月末現在)

収入	件　数	金　額
寄付金合計	3万7120件	7億7342万4297円

仙台レインボーハウスは、東北だけでなく全国の震災遺児支援のセンター

仙台ワンデイプログラムの流れ

10時　ファシリテーター集合　打ち合わせ。日常生活からファシリテーターへ気持ちの切り替えの時間

11時　昼食休憩

12時半　参加者受け入れ準備

13時　参加者集合

13時10分　はじまりの輪　おしゃべりの部屋で自己紹介。マイク代わりのトーキングスティック（柔らかい布の棒）を順番に回す

13時半　あそびのじかん（その1）　それぞれ思い思いの場所で自由に遊び、ファシリテーターが寄り添う

14時半　おやつのじかん　楽しい団らんの時間。子どもたちがリラックスしておしゃべり

14時50分　おはなしの時間　おしゃべりの部屋で毎回ごとにテーマを決めて順番に話す。ファシリテーターは子どもの声に耳を傾けて聞く

15時10分　あそびのじかん（その2）

16時15分　おわりの輪　おしゃべりの部屋で今日の感想を一人ずつ。手の「おにぎり回し」でおしまい

16時半　参加者解散　ファシリテーターは記録記入とふりかえり。レインボーハウスでのファシリテーターとしての自分から、日常生活への切り替えの時間

虹の家のルール

①ひとやじぶんのからだをきずつけない
②ひとやじぶんのこころをきずつけない
③ファシリテーターといっしょにいる
④ストップといわれたらやめる、とまる
⑤ひとのことをよそではなさない（ひみつだよ）
⑥はなせないことはパスできる
⑦トーキングスティックをもっているひとがはなす。ほかのひとはきく

石巻、東松島、女川などの遺児を支援する石巻レインボーハウス

陸前高田とその周辺の遺児を支援する陸前高田レインボーハウス

教育にも力注ぐ

玉井義臣会長は、仙台虹の家の地鎮祭で「癒しだけでは十分とはいえず、セルフエスティーム（自尊感情）を尊重し自信をもたせ、自分で努力するように向けていくことが大切だ」とあいさつした。遺児への教育的支援も大切にしている。

特に力を注いでいるのが海外研修。キャンベラ豪日協会の主催で、春休みや夏休みに約20日間の派遣事業を行っている。過去5回、計20人の震災遺児が参加。ニューヨーク育英学園は、13年から毎年小学生2人をサマーキャンプへ招待し、現地日本人小学生との交流やホームステイを企画。ソフトバンク社の「TOMODACHIサマープログラム」では、東北の一般高校生と震災遺児が一緒に短期研修を行っている。また、今春は米国サンディエゴの日本人有志「SDJEN」が大学生2人をホームステイへ招待。過去にはフランス、ロシアからの招待もあり、中高生が参加した。

海外体験をした遺児は、帰国後の学校生活も前向きに取り組み、夢や目標に向かってがんばっている。今後は学習支援団体と連携して、震災遺児の学習サポートにも取り組んでいきたい。

他団体とも連携

東北レインボーハウスは震災遺児支援活動の拠点としてだけでなく、被災地の子どもを支援する団体との協働、連携を少しずつ広げている。

震災以前から宮城県での遺児支援活動で連携していたNPO法人子どもグリーフサポートステーションとは、今年1月から虹の家で、毎月2回、仙台ワンデイプログラムを合同開催している。震災遺児だけでなく病気や事故などで大切な人を亡くした子どもを合わせて10～15人、その保護者5～10人が毎回参加している。

仙台では2014年4月から、仙台市教委の適応指導教室として、虹の家の一角を専用利用している。不登校の中学生約20人が平日の週5日、通っている。また、低所得家庭の子どもを学習支援するNPO法人アスイクは、平日の放課後に週2日、パソコンを使ったeラーニング教室を開講、仙台市内から毎回15人前後の子どもが通っている。アスイクとの協働でNPO法人 Teach For Japan も加わった。

石巻では、母親の子育てを支援するNPO法人ベビースマイル石巻が週1回、ベビーマッサージの講座などを行っている。陸前高田では、岩手県里親会が里親同士の交流サロンを開催。地元団体から利用の相談が増えている。

震災遺児の交流プログラムは週末開催が中心のため、地域復興の力になれるように、平日の有効活用にも力を注ぎたい。

僕は踏ん切りをつけたいけど、母はまだ…

東日本大震災から7年　それぞれの思い

西田　正弘
東北事務所長

東日本大震災・津波から丸7年という月日が流れた。震災・津波という出来事は時間的には過去になって行くが、その影響は家族を亡くした子どもや保護者に現在も様々な形で現れている。東北レインボーハウスでは3月11日に「心の居場所」プログラム、その前後で東北・神戸の遺児家庭「交流会」を開催した。子どもたちの今をお伝えする。

パパは死んだの？

この4月に小学1年生になる女の子。チョコレート色のランドセルを買った。

震災時はお母さんのお腹にいてお父さんを知らない。2歳のときのある夜、寝床で突然「パパがいる」といった。3歳の夏、親戚のおばあちゃんの葬式で涙ぐんだ。その後、「パパは死んだの？」といったあと声を上げて泣き出したという。いないからこそ高まる存在感。成長とともに亡き人の「生きざま」を知っていく。

震災時にお母さんのお腹にいた子は20人ほど。岩手県に住むKさん（73）もそんな孫を育てているひとりだ。しかも孫の母であるKさんの娘が出産後にガンになり死亡。不安がふとよぎるが、昨年10月にあしながの心塾レインボーハウスを訪問し一変した。「中高生のケアから、高校大学生の奨学金、大学生寮を建てて応援している。先の不安はなくなりました」。子どもと同時に保護者へのサポートも求められている。

未だに父親が行方不明の子もいる。「気持ち的に踏ん切りをつけないと進めないような気がして。お母さんはまだそんな気持ちになれないようだけど」。高校受験を前にぽろっと聞かせてくれた。親子でもそれぞれの気持ちがあるのだった。彼は志望高校に無事合格。

自分のせいだと…

千葉雄貴さん（18）は母、弟、祖父母を亡くし父親と2人きりに。運動会などで同級生の家族を見て孤独感を感じた。しかし心配させてはいけないと父親にはいえなかった。高校で美術部に入り「言葉では表現できないことを表現すること」を知った。4月に岩手県大槌町を離れアニメーターを目指し東京の専門学校に進学する。

仙台の交流会には神戸からも成人した遺児が家族連れで参加した。太田誠さん（34）は11歳で母と兄を亡くした。妻の久美子さんに話すまでの10年間、2人が死んだのは自分のせいだと思っていた。震災前日ふざけてご飯茶碗に箸をたてたのだ。東北にもそう思っている子がいるのではと正直にかたりかけた。それに千葉萌さん（21）が「私も思っていたし、その思いは消えない」と応じた。母は職場から自宅に戻る途中で津波にのまれた。涙があふれ出た。「泣きたいときには泣けばいい」。誠さんは傍らにいた。誠さんとの別れの後、萌さんは書いた。「思いやその場の空気を感じて一緒に過ごすことって大切なんだ」。萌さんは保育士になって1年。明日からの仕事に戻っていった。

東北レインボーハウス（仙台、石巻、陸前高田）では今も1600人ほどの遺児、その家族とつながっている。一人ひとりの今があると痛感する日々だ。「これから」を支えるために「遺児同士の交流の場」づくりや家庭訪問、学習支援、海外研修などを続けたい。

仙台レインボーハウスで開かれた東日本大震災と阪神大震災の遺児家庭の交流会。神戸の遺児はもう皆成人したが、「だからこそわかることもある」と東北の遺児の傍らに寄り添う＝3月4日

天国のお母さん　私も2児の母です

神戸での交流会。20年以上の時を経ても亡き人への思いは変わらない＝1月17日

神戸　追悼と交流のつどい

阪神大震災から23回目の1月17日を前に、阪神大震災遺児家庭と東日本大震災遺児家庭の「追悼と交流のつどい」が同月13日、神戸レインボーハウスで行われた。阪神大震災遺児家庭17世帯30人、東日本大震災遺児家庭7世帯10人を含め計80人が参加。阪神大震災で亡くなられた方々を偲ぶとともに、阪神大震災と東日本大震災という2つの震災で愛する人を亡くした遺児家庭同士が、互いに歩んできた経験と意味を分かち合うつどいになった。

まず出席者全員で、今は亡き愛する人々への黙とうを捧げた。次に阪神大震災遺児代表の福井友利さん（27歳・社会人・三田市在住）が「亡きお母さんに会いたいという寂しさを紛らわしてくれたのが、レインボーハウスでした。東日本でもたくさんの子どもたちが大切な家族を失い、今度は自分ができることをしたいと思い、東北の子どもたちと一緒に時間を過ごしてきました。2つの震災がなかったら生まれなかった出会い。この出会いはお母さんからの最後の贈り物だと思っています」と述べた。

同じく阪神大震災遺児の林田美由紀さん（37歳・社会人・加古川市在住）は、「天国にいるお母さん、私も男の子2人の母になりました。子育ての悩みは絶えないね。聞いてもらえるはずのお母さんはここにはいません。でも夫や妹、お父さんに聞いてもらいながら前を向いてがんばっていきます」と思いを語った。その後、阪神・東北の遺児同士、父親同士、母親同士などのグループに分かれて、亡き人への思いなどを話し合い、心を分かち合い、交流を深めた。

震災直後の 1995 年 3 月 26・27 日、有馬温泉に震災遺児 57 人、保護者 39 人、ボランティア 48 人の計 144 人を集めて行った「ありまのつどい」。震災からお風呂に入れなかった遺児や保護者らは「体も心も温まった」という

阪神大震災で親を亡くした子どもたちの支援施設「神戸レインボーハウス」（神戸市東灘区本庄町）が1月、竣工20周年を迎えた。本会が初めて子どもの心のケアに取り組んだ場所であり、大学奨学生が生活しながら学ぶ塾としても遺児を支えてきた。本会はこの経験を基に、心のケアや進学支援の施設を東京、東北、さらにアフリカにも広げてきた。ご支援いただいた皆様への心からの感謝を込めて、20年の歩みと現状をご報告する。

神戸レインボーハウス竣工20周年特集 上

心のケア活動の出発点

あしなが運動を一変させた「黒い虹」

玉井義臣

小5のかっちゃんが描いた「黒い虹」が、私たちのあしなが運動を根底からゆさぶり一変させた。1枚の絵はそれほど衝撃的で、震災遺児の心の奥底にある闇を、私達大人に、行政に訴えていた。かっちゃんは両親、姉妹、兄弟と6人で瓦礫の下に閉じ込められた。母と姉と兄は救出されたが、父と妹は亡くなり、かっちゃんは9時間生き埋めのまま恐怖と寒さと飢えと闘っていた。兄たちは大声で彼の名を呼び続けたが、恐怖で返事ができなかったという。

半年後、香住の海水浴のつどいで、皆思い思いの絵を描き、それを打ちつけトーテムポールをつくった。彼の絵は逆さに打たれ、何の絵かわからなかった。神戸に帰ってから、それが月と星が輝く夜空に虹が架かり、その虹の赤い部分をその上から真黒のペンキで塗りつぶしていたのだ。かっちゃんは言葉で言えない恐怖とか不安とか絶望を1枚の絵に託して世間に訴えたのだろう。この絵こそかっちゃんの心象風景であり、多くの震災遺児の心を代弁するものだ。

黒い虹

秋元かつひと（小学5年）

「かすみのつどい」で絵をかきました。
「きれいなにじ」をかきました。
青と黄色のにじをかきました。
月をかいて、空を黒くぬりました。
ぼくをたすけてくれた、お父さんのことは、夜におもいだします。
よくこわいゆめをみます。
いつもおねえさんが、大きいこえでおこしてたすけてくれます。
学校でともだちに、よくどつかれいじめられます。
でもブランコやスベリだいが大すきです。
べんきょうはきらいだけどしゅくだいはちゃんとしていきます。
お父さん、てんごくでげんきでいてください。

今振り返ると、神戸レインボーハウスができたのは、阪神大震災直後から現地に入り、移住し、震災遺児支援に全力を傾けた樋口和広と八木俊介（としゆき）の職員が2人とも交通遺児だったことが、大きかったと感じる。

震災遺児は、それまで出会ったどの種類の遺児とも違った。職員、ボランティアを力の加減なく殴る、蹴る。反対に、残った親の言うことを聞き、率先して手伝いをするいい子もいた。自分のせいで親が死んだと自責の念にかられる子どもや、親を思い出して死にたいと泣く子どももいた。

気持ちの表し方は過激だったが樋口、八木は自分の生い立ちに重ね合わせ、何とか彼らを助けたいと心の底から思ったに違いない。

アメリカのオレゴン州・ポートランドに遺児の心のケアの場所「ダギーセンター」があることを知り、震災1年後に見学・研修に行ったことが、それまで自らの遺児体験だけで子どもと接してきたあしなが育英会にとって大きな転機となった。

ドナ・シャーマン所長（博士）をはじめ、スタッフが皆暖かく、優しい気持ちで子どもと接していた。専門に勉強した自信と経験に裏打ちされた優しさだった。心のケアの具体的な方法、理論があった。

こうしてレインボーハウスの具体的な姿を描けるようになった。

日本中の支援者、ボランティア、あしなが大学生にも支えられた。

ボランティアとあしなが大学生は、元喫茶店を借りた神戸事務所に雑魚寝で泊まり込み、翌日は震災遺児調査やつどいに出ていった。職員も若かったが、彼らが来ると事務所が活気にあふれかえった。彼らの存在なくして震災遺児救済運動はあり得なかった。

全国の支援者は、寄付金とともにたくさんの励ましの手紙を送ってくれた。神戸事務所のある関西では、さまざまな団体が会合に神戸事務所職員を呼び、震災遺児の状況を聞いてくれた。突然親を亡くした遺児のつらい心情を話す職員も、聞く側もともに涙した。レインボーハウスの玄関にある寄付者銘板には数えきれない名前が刻まれていて、レインボーハウスが全国の人の支援でできたことが実感できる。また、玉井会長をはじめ理事の方々が若い力を信じてくれたことも大きかった。

樋口はその後、郷里の地域振興財団に移籍して、活躍している。

八木は大学院に通い、心のケアで博士号を取得、現在は2006年に東京都日野市にできたあしながレインボーハウスで、全国の遺児を対象に心のケアを行っている。

神戸レインボーハウスができたことは、間違いなくあしなが運動の大きな転機となった。

（伊藤道男奨学課長・元神戸事務所長）

この子らを何とか助けたい … 交通遺児職員は心底思った

遺児の心が安らぐように外観に曲線を使った神戸レインボーハウス

阪神大震災遺児の支援拠点

設計委員会では「落ち着ける場所」「安全で安心できる場所」に徹底的にこだわった。具体的なキーワードは「家」。

レインボーハウスは鉄筋コンクリートの5階建て。どうしても「施設」「ビル」という感じがつきまとう。そこでいくつかの工夫を試みた。

安全・安心を徹底追及

まずは外観。道路に面した部分を2階建て、後部を5階建てに設計して、道からは2階建ての建物にしか見えず、「そびえ立つ」という感じをなくした。屋根は切妻型で、色はベージュ系の暖色。近隣の建物に合わせるようにして、際立って目立たないように配慮した。しかし、周辺のマンションと同じではなく2階建て部分を円形にすることで柔らかい、独創的な「家」となっている。

また、中庭をつくり玄関を建物の奥に配置することで、そこを通るほんの数十秒の間、遺児たちが「これから虹の家に入るんだ」と無意識に心の準備をすることになる。一方、建物の中にいる子は、その様子が見える。

建物の内部の床は、素足で歩けるよう全館カーペット敷き。これも家と同じような感覚でこの建物を利用してもらうためだ。階段は子どもたちが利用するものと、それ以外の人が利用するものとに分け、プライバシーを保護し、見知らぬ人と会う緊張感を軽減。家具や内装もできるだけ木製のものを使用した。

❖

レインボーハウスは、4つのゾーンで構成され、それらが一体となって遺児の癒しを実践するようになっている。

【癒しのゾーン】

ここでは子どもたちが、遊んだりしながら自然な形で心を癒していく「癒しのプログラム」とレインボーハウスに親しんでもらうための「来所促進プログラム」のため、12の部屋が用意されている。

これらの部屋は1、2階の東側部分にまとめられていて、子どもたちはこのエリアの中で守られるようにしてプログラムを受ける。

また、手すりやスロープを採用。その他に点字ブロックも敷設されている。

【ボランティアゾーン】

573人の震災遺児を癒すには、ボランティアの存在は不可欠。しかしながら、癒しに携わるには、知識と技術が必要で、研修が必要になってくる。ボランティアのゾーンでは、研修会や講座などを開いて遺児の癒しのお手伝いをしていただくファシリテーターを養成している。

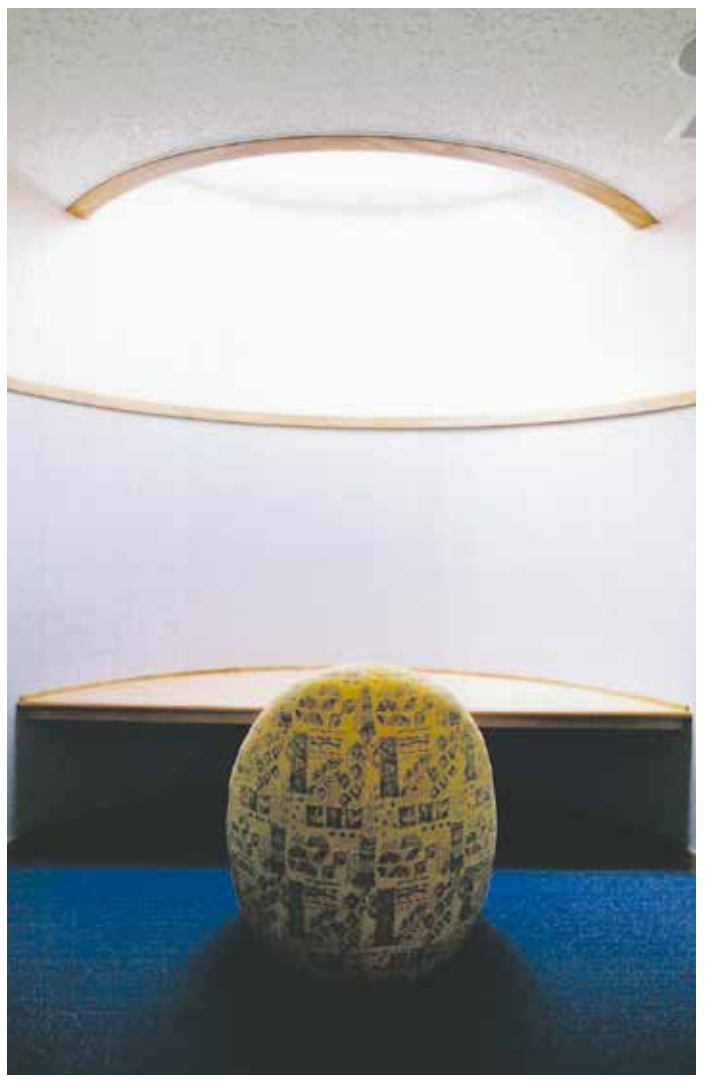
【学生寮ゾーン】

学生寮は、震災遺児の癒しを考える上で、最も重要なキーポイントとなる。ここに、親を亡くした経験を持つ遺児学生が入ることで、子どもたちがいつ来ても「お兄さん」「お姉さん」がいる環境が生まれ、心の傷がもっと深刻な「来ない子」「来られない子」のところへでかけて行って虹の家の活動を広げることができるようにもなる。

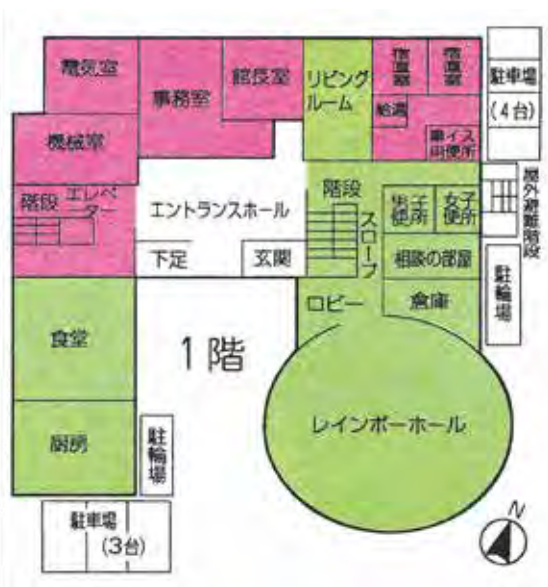
寮費を朝夕2食付月1万円におさえ、遺児学生の進学の機会を増やし、癒しのスタッフの確保にもつなげている。

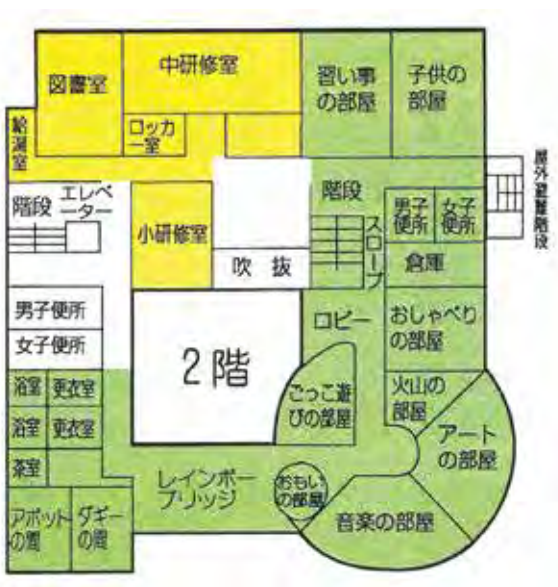
【共用ゾーン】

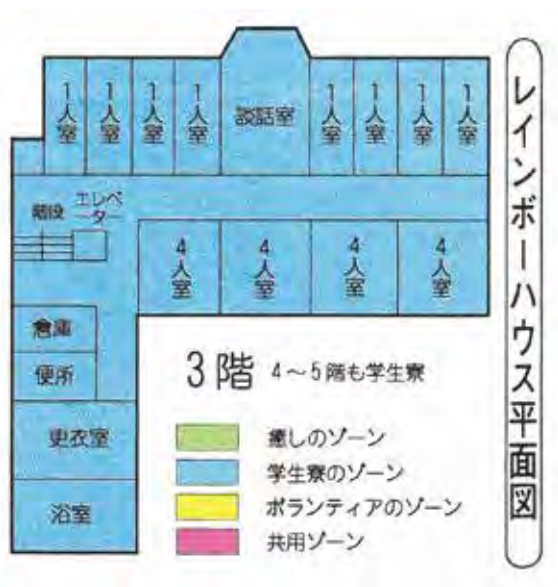
以上3つのゾーンの機能を有効に活用するため、事務室、館長室、宿直室を1階玄関前に集約して配置した。また、体の不自由な人にも快適に生活していただけるように、車椅子用トイレやエレベータを設置した。



上：なくした人のことを想い、ひとりで泣ける「思いの部屋」
左：思いっきり暴れてストレスを発散できる「火山の部屋」。サンドバッグをつるし、全面をマットで保護



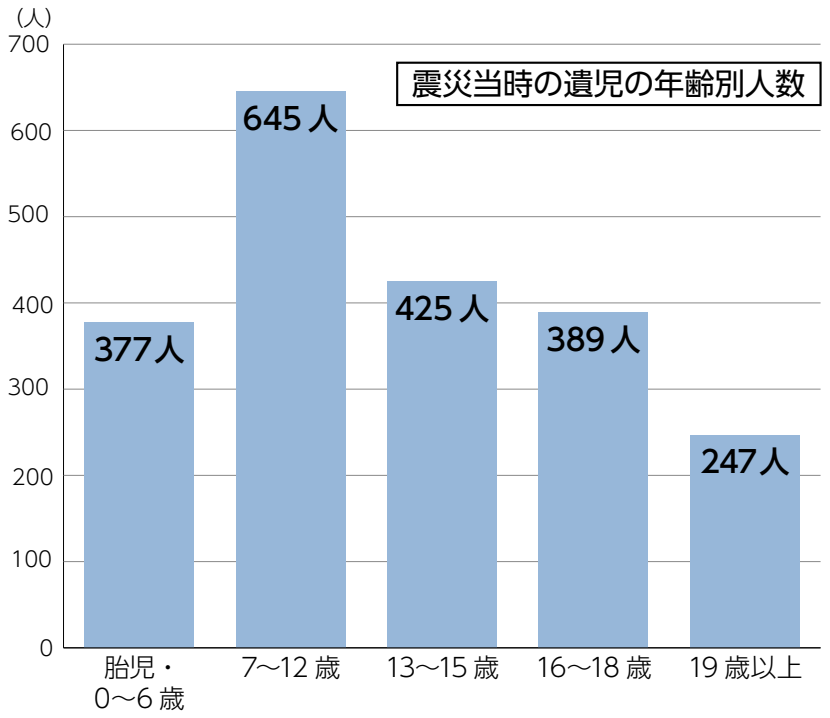




みんなで輪になってキャンドルを見つめた（石巻）

夕食を囲みながらお互いのことを話す（11 日・釜石）

東日本大震災から８年



進学支援　これからが正念場

一時金を給付した2083人の内、現在関わりのある遺児は、23歳以上で約600人、小中学生がそれぞれ約200人、高校生が約270人、大学生が約400人となっている（円グラフは震災当時のもの）。

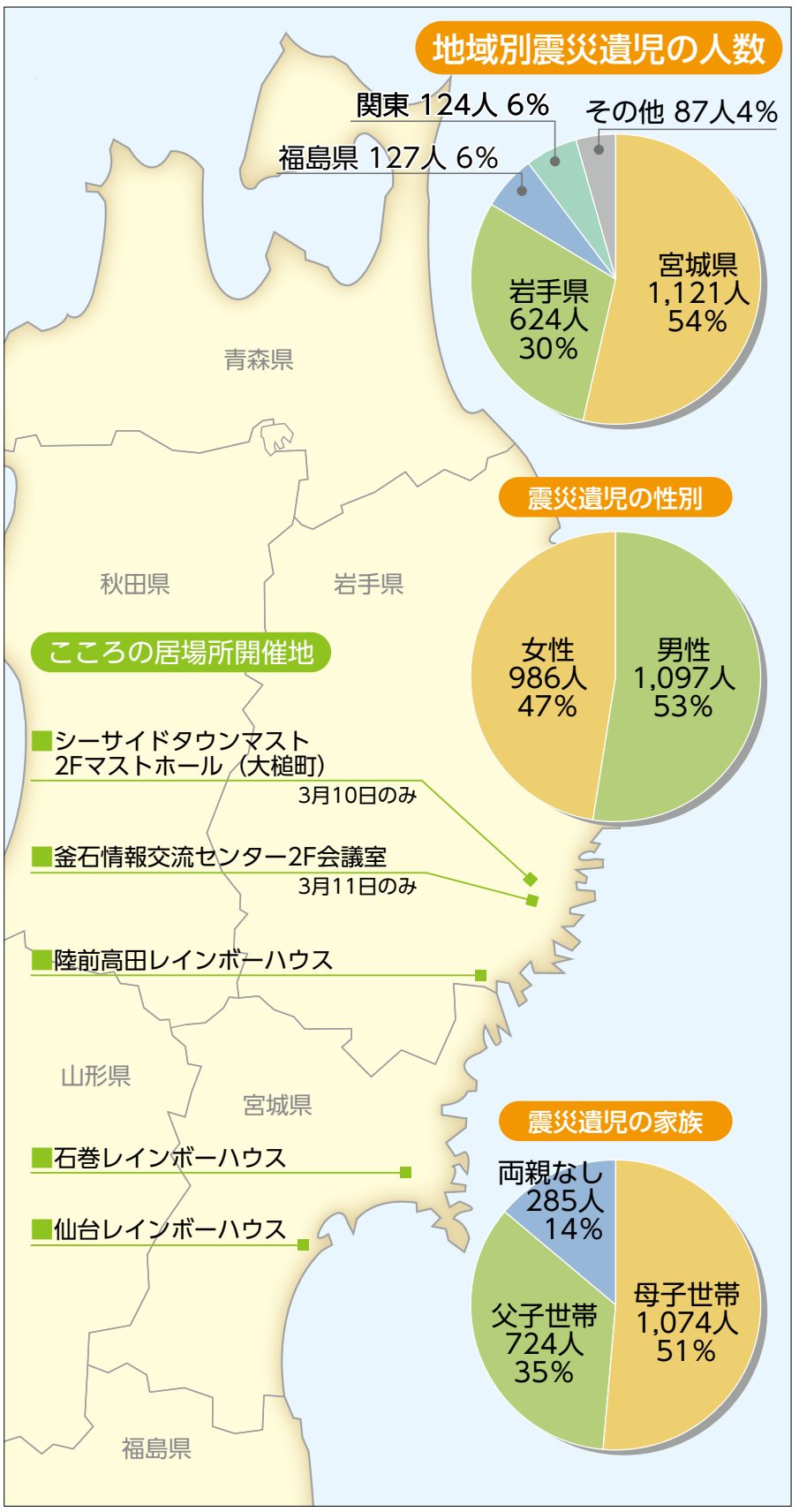
「子ども2人も自立し、今まで大変お世話になりました。学費関係はやはり出費が大きく苦労しましたので感謝しております」「長男の就職が決まり春から社会人。長女二女も社会人、それぞれ努力しながら暮らしてます」という声がある一方、「震災後引きこもってしまった子どもたちについて理由もわからず将来のことも不明です。他にいらっしゃるのでしょうか？

報道では前向きに道を見つけて行く子どもさんばかりクローズアップされ、取り残されている感じがします」という手紙も届いてる。

震災以後行政や民間団体が震災遺児に対し「給付型奨学金」制度を創設し支援を続けて来た。レインボーハウスに来る子どもたちも様々な支援を利用している。

しかし前述の引きこもりや高校中退後先が見えない子もいる。今後どんなつながり（支援）が求められるのだろうかと自問する。

子どもたちの成長は早い。その成長にあわせたプログラムの実施と個別のニーズと家族の状況を加味して関りを持続しながら新しい支援の形を模索しなければならない。また子どもたちが住み学ぶ地域の支援機関との連携を模索する必要がある。仙台では昨年から一般社団法人仙台先進学習サポート（代表岡部朋永東北大学教授）とつながり「家庭学習、先取学習」のノウハウを学ぶ機会を得た。そこで学んだ子どもが希望高校に合格したという報告もあった。「筆舌に尽くし難い」経験もしている子どもの育ちをケアで支え、「学び」へのつなぎを今後の課題としたい。



あしながの東北支援

震災3日後に震災遺児への「特別一時金」給付支援を発表、国内外に募金を呼び掛けた。4月11日には仙台駅近くに東北事務所を新設、下旬には特別一時金制度を早く広く伝えるために「お知らせチーム」を職員と大学奨学生らとで結成し被災地の避難所、行政などを回った。

一方でファシリテーター養成も開始、仙台グリーフケア研究会の協力も得てプログラム「ワンデイプログラム」を石巻小学校で開催、6人の小中学生と保護者2人が参加、6月下旬には花巻温泉で宿泊のつどいを開催、21人の小中学生と12人の保護者が参加した。

8月は子どもたちと東北事務所をつなぐ「東北事務所だより」を発行。2012年には新卒職員5人を含む10人体制とした。

特別一時金募金は予想を上回る協力を得て、結果的に2083人に対し一人あたり283万円を支援できた。2014年3月に仙台と石巻にレインボーハウスをオープン、6月には陸前高田レインボーハウスもオープンした。

2015年以降、毎年1000人程度の子どもと保護者がレインボーハウスやその他の地域で行うプログラムに参加している。

来所が難しい家庭には、電話や家庭訪問も継続してきた。

神戸レインボーハウス竣工20周年特集　中

「救えなかった」忘れられない涙声

上村宗弘・医師（震災当時の学生募金事務局長）

阪神・淡路大震災のとき私は大学3年生で、あしなが学生募金の事務局長だった。震災が起こり、震災遺児の義援金を募るために、緊急街頭募金を実施することになった。募金活動のメンバー数人であしなが育英会の事務所に泊まり込んで、日本中の学校にボランティア募集のダイレクトメールを送った。カップ麺を食べながら1週間ほど夜通しで作業した。その結果、日本全国の高校、大学からすさまじい反応があり、全国各地で街頭募金を行うことができた。同時に、被災の現地では、震災遺児を探し出すローラー調査が動き始めていた。

そんな中、私たちは自然な流れで、震災遺児たちを励ますキャンプ「有馬のつどい」を計画した。私も実行委員のメンバーになった。震災発生以前に実施していた遺児の高校生向けの「つどい」では、いわゆる「自分史を語る」ことがつどいの主なプログラムであった。しかし震災遺児にとって、わずか数週間前の親との死別や被災の体験を語ったり、耳を傾けることは極めて慎重でなければならないという議論をした。そして震災遺児の「有馬のつどい」では「無理やりに自分史を話させることはやめよう」と実行委員全員一致で決めた。遺児たちに自分史を話させなかったことは、いま振り返ると正しかったと感じる。

忘れられない出来事がある。阪神・淡路大震災5年後のある夜の出来事だ。

当時私は、遺児の仲間たちとアパートで共同生活をしていた。そのアパートに神戸レインボーハウスの阪神・淡路大震災遺児の大学生A君と、遺児OBの社会人Bさんがアパートに遊びに来て、お互いが居合わせた。するとOBのBさんが、震災遺児のA君に向かって突然、語り始めた。OBのBさんは震災当時、兵庫県内で被災者の救援活動をしていたそうだ。

「救えなかったんだよ。たくさんの人を。毎日、毎日、死亡者の数が増えていって。救えなかったんだよ。ごめん」。最後には語りかけていた言葉が、嗚咽に変わっていた。そして、「でも、やっと君に会えた。やっと会えた」と何度も繰り返し語っていた。私は震災遺児たちと、震災遺児を思う人たちが、どこかでつながっていることを確信しながら、その場を眺めていた。

阪神・淡路大震災発生から神戸レインボーハウスの開設初期に、あしなが募金やケアのつどいといった活動に関わり、かけがえのない体験をしたことは、私にとっての生涯の宝だと思っている。

募金オープニングセレモニーで“あしながさん”に扮装（東京・銀座＝95年10月）

米ダギーセンターに学ぶ

ダギーセンターのドナ・シャーマン所長。1999年、神戸レインボーハウスを訪れ、ダギーセンターに通う子どもの絵を贈呈していただいた

米オレゴン州ポートランド市のダギーセンター

震災で肉親を失い暗やみの中で泣いている子どもの心を、どうすれば癒やし、励ますことができるのか。この難題の前でもがいていた本会職員にとって、希望の光となったのが、死別児の心のケアプログラムでは世界で最も実績のある米国オレゴン州ポートランド市のダギーセンターだった。センターの名前は、脳腫瘍のため13歳で亡くなったダク・トゥルノ君の愛称「ダギー」に由来する。

ダギー君は「死ぬ瞬間」の作者として名高い精神科医エリザベス・キューブラ・ロス博士に手紙を書いた。

「死とは何？　なぜ子どもが死ぬの？」「死はより大きな世界に帰るのよ」。

こうした手紙のやりとりで、ダギー君は心の安らぎを得たという。

震災遺児の傷ついた心と必死に向き合っていた本会職員は、すがるような思いでダギーセンターを訪ね、アドバイスを求めた。ダギーセンターも事態の深刻さを理解し、ドナ・シャーマン所長や職員が神戸を訪れるなど全面的な協力体制をとった。

ダギーセンターのケアとはどのようなものか。同センターのC・L・ホワイト・トレーニングディレクタは、1996年、本会が神戸と東京で開いたシンポジウム「震災遺児の悲嘆と癒し」で、4つの原則を説明した。

＊

①肉親や親しい人を失った悲嘆は自然な感情、反応であり、不健全ではない。大切な感情だということ。

②一人ひとりに、悲しみを癒す能力が備わっている。癒しとは悲しみに向かい合い、対応し、適応していくこと。

③悲しみの深さ、悲しみが続く期間の長短は、一人ひとりに差がある。みんな独自の悲嘆がある。

④悲しみを癒すために受けいれる場所が必要。同じ悲しみを持つ者が共通の経験を話し合うことで、ひとつのコミュニティ（共同体）になり、共感が生まれる。

＊

そして、震災遺児が抱える問題の大きさについて、次のように語った。

「神戸の子ども、特に親を失った子どもは、トラウマ（心の傷）が大きい。見た目には、何でもないようですが、小さなエネルギーで何とかトラウマを抑えようとしています。もちろんそれでも生きていくことはできます。しかし、悲しみが癒されないと、将来、難しい問題がおきるかもしれません。神戸の人々や、あしなが育英会の愛とケアで、そのようなことが起きないよう願っています」

あしなが職員は、ダギーセンターのアドバイスを重く受け止め、協力に深く感謝し、神戸の実情に合わせるように工夫を重ねて、この20年、歩み続けてきた。その道はまだ続いている。

「また会おうね」「またね！」

東日本大震災から8年、阪神淡路大震災から25年――震災遺児と保護者のつどい

なくなった家族へのメッセージをのせた風船を屋上から飛ばす子どもたち

11月16・17日、宮城県仙台市青葉区の仙台レインボーハウスにて、「東北・神戸交流のつどい」が行われました。当日は東北と神戸から33人の震災遺児と保護者が参加。世代ごとに分かれて、それぞれに合わせたプログラムを行いました。各グループの担当職員からのレポートをご紹介します。

小学生

小学生は「死」を空想的なものではなく、大人と同じ概念で捉えはじめ、揺れ動く過渡期の年齢です。そのため発達段階に応じて、2つの班に分けてプログラムを行いました。

小学3年生の班の参加者は震災時0～1歳。「なくなった人の記憶がない」という前提を共有したうえで、どんな時にその人のことを考えるかを話し合いました。いつもは「パス」となる場面でも「写真を見ると、こんな顔だったんだって思う」など、自分なりに言葉にしていました。

小5・6年生の班では、「肩車してもらってた写真がある」「お酒が好きだったと聞いた」と周りからの思い出を集めて、なくなった人の姿やつながりを感じているようでした。

最後に、みんなで風船にメッセージを書き、大切な人がいる空へと飛ばしました。「小学生になったよ」「また会いたいな」。思い思いの言葉をのせた風船を、見えなくなるまで見送りました。（有坂萌・高橋耕生）

スケジュール

●1日目
- 14：00　集合
- 14：30　はじまりのわ
- 15：00　分科会
  - ・こども4グループ（小学生2班、中高生1班、18歳以上1班）
  - ・保護者4グループ（父親1班、祖母・母親3班）
- 17：30　懇親会

●2日目
- 9：00　フリータイム
- 10：30　アンケート記入「またねの時間」
- 11：00　解散

中高生

参加者は震災当時3～8歳。半数以上が被災した地域と現在住んでいる地域が異なりました。

「どこで震災にあった？」「今の生活について」など、お互いの共通項を探しながら分科会を進める中で、特に共感や質問が多かった話題は「学校生活」。そこから「友だち関係」「宿題」などに話が広がりました。

印象的だったのは、震災・防災の授業の話。参加者の男子が中学生のとき、「その時間は出なくても良いよ」と担任から言われ、意味がよくわからないまま防災の授業を欠席したそうです。「後で考えると気を使ってくれたのかなと思うけど、自分は平気だったのに」。またある子は、「担任が勝手に、自分の親が死んだことをクラスで言っちゃった」と話していました。

遺児同士で安心して話せる環境、受け止めてくれる人がいるからこそ、口に出せることもあります。各々の感じ方や経験を互いに受け入れ、再確認することができる時間になりました。（山下高文）

18歳以上

子どもグループ最年長のこの班では、阪神淡路および東日本大震災の震災遺児が一緒に過ごしました。

大切な人を亡くしたときの年齢は小学生から高校生まで様々ですが、多くが二十代・三十代に成長し、自分自身の思いや考えを「言葉」で表現できる年代になっています。

自分の手のかたちを紙に写し、それぞれの指に対応したテーマを話す「5本指ワーク」では、8年あるいは24年の月日の中で何を感じてきたかに焦点があてられました。

「亡くなった親の年齢を超えることが想像できない」「沢山の人との出会いが支えになっていると感じる」などの言葉が共感を呼んだほか、「上京や就職など環境が変わったとき、自分の親が亡くなっていることを周囲の人に言えている？」という問いには、「相手によって正直に伝えたり、架空の話をしたり」という答えが。最後に「今、みんなは幸せですか」の問いに、「色々あるけど、幸せだね」と笑い合いました。（阿部結花）

保護者

愛する人が震災で突然いなくなったあの日から、今日まで過ごした日々や気持ちは人それぞれです。

「あの時の自分に会えたら何を話す？」という質問に、あるお母さんは「大丈夫だよって言いたい」と答えました。「あの時の私は周りから何を言われても聞けなかった。だから私から、大丈夫だよって伝えたい」。8年間の歳月を歩んできた今だからこそいえる言葉だと感じました。

父親グループの参加者はお互い顔見知りで、終始リラックスした雰囲気でお話しされていました。子育ての苦労や社会人になってからの問題なども共有され、父親同士の存在が大きな力になっている様子でした。

「過去を悔やんだりこれからを不安に思うより、今を大切に生きていきたい」というお話が心に残りました。（富岡誠・小川里奈）

東北・神戸をつなぐ交流会

参加者インタビュー

孫と共に歩んだ８年

来年社会人になる孫のさつきさんと

東松島市・熱海（あつみ） 恵美子（えみこ）さん（64）

東日本大震災の津波で娘さんご夫婦をなくし、のこされた孫娘・さつきさんの親代わりとなった熱海恵美子さん。この8年間、さつきさんと共に継続してあしながのプログラムに通い、他の保護者や職員と交流を深めてこられました。

当時は小学4年生だったさつきさんも今年で19歳。来春には東京の製菓専門学校を卒業し、宮城県内で就職する予定だそうです。さつきさんの成長を見守りながら共に歩んできた恵美子さんに、これまでを振り返ってお話を伺いました。

ご家族について教えてください。

もともとは、母・私・夫・息子・娘夫婦・さつきの7人家族で、みんな一緒に住んでいました。娘は妊娠中で、震災の翌月にはさつきの妹が生まれる予定でした。

震災時はどんな状況でしたか？

震災当日は、私は職場近くで避難していて、自宅のほうに戻れたのは2日後でした。避難所になっていた大曲小学校に行ってみたら、母とさつきだけがいて……。一度はみんなで逃げたけど、娘夫婦はお腹の赤ちゃんのための荷物を取りに家に戻ったそうです。「携帯にかけてもずっと通じないんだ」ってさつきに言われて、「津波にあったのかな」とは考えていました。

なくなったことがはっきりわかったのは……。

遺体の特徴が張り出されていて。娘は妊婦だったからすぐわかりました。私ひとりで確認に行って、さつきには後日、埋葬するときに初めて伝えました。そのときは泣いていたけど、それ以降は私の前では涙を見せずに、小学校にも普段どおり通っていて。子どもながらに、悲しみを表には出さないようにしていたんだろうなと思います。

レインボーハウスに通い始めたきっかけは？

2011年の5月に、あしながからプログラム（石巻小学校の体育館で行った「震災・津波遺児のための心のケアプログラム」）のお知らせがきて、さつきを誘って行ったのが最初。その後に石巻と仙台のレインボーハウスができて、毎月のワンデイプログラムや、季節ごとのイベントに来るようになりました。最近はさつきだけで来ることが多かったけど、「働きはじめたら一緒に来れる機会も少なくなるから」って、今回はふたりで参加しました。

今日参加されてどうでしたか？

以前お会いした人と再会して、「お互い元気だった」って確認できてよかったです。レインボーハウスで知りあった方と、神戸で夜景を見たり、いっしょにお泊りしたこともありました。お孫さんが同じくらいの年で、おばあちゃん同士仲良くなったんですよ。

レインボーハウスでの体験を振り返って、どんな感想を持たれましたか？

被災地に住んでいても、身内がなくなってない人も多いから、家族をなくした人どうしで話す機会はあまりないんです。でも、レインボーハウスはおなじ立場、おなじ目線でしゃべれるから楽。さつきも、「ずっと心のなかにしまっていたことを、ここの人には話せた」っていう体験が、ふとした瞬間にあったみたいです。誰にも言えなくてひとりで抱えてしまうのは一番つらいから、おなじような境遇の子たちが集まって、自分の言葉で気持ちを表現できる場所があるっていうのは、ありがたいですね。

さつきさんが学校で作ったケーキ。恵美子さんも今度食べさせてもらうのを楽しみにしている

子どもたちの感想

◆ みんなとあそんで楽しかった！（小3・東北）

◆ 面白いやつと出会った。（小5・東北）

◆ 震災はいやな出来事ではあるけれど、それがあったから色んな人に会う機会ができたと再確認し、その気持ちを他の人も持っているのだと気づけました。（高1・東北）

◆ 人それぞれに悩みや思うことがあり、あらためて震災について考えさせられました。みんなの話を聞いて心が充実し、実りある時間を過ごせたので、また来たいと純粋に思いました。（20代・東北）

◆ 自分の想いを言葉にしてしっかり相手に伝えることができる世代で、共感、新たな発見がありました。時間が足りないくらい話がつづいて、本当に来て良かったと思える濃い時間を過ごせました。（20代・神戸）

◆ 「今、幸せ？」という質問に対して、震災でお父さんやお母さんはなくなってしまったけど、今は幸せだとみんなが話しているのを聞けて安心できた。来年も交流のつどいがあるなら、また参加してみんなと一緒に過ごしたい。また会おうね。（20代・神戸）

保護者の感想

自分の過去を振り返って反省することが多かったが、東北の方の「今を生きるためには、くよくよしてもしょうがない」という言葉に安心した。私に気づきを与えてくれてありがとう。（父・神戸）

◆ 子どもの年齢や地域が違っても、みんな同じように感じて色々と頑張っているとわかって、日頃の心配事がいやされた気がする。（母・東北）

◆ 久しぶりにお会いする人は「元気で過ごしていたんだな」となつかしい気持ちになり、安堵感がありました。初めてお会いする人には、「ここからまたつながりが始まるのかな」と思いました。（祖母・東北）

◆ 日頃、他者との会話では話せないことも、深いところまで話すことができました。自分へ一声かけるとしたら、「よく頑張ってるな」と自己肯定したいと思います。他の参加者にも、励ましと尊敬の気持ちが湧きました。（父・東北）